



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2516号 2015.6.28 発行

### 知的障害者名義のカード不正取得、容疑の介護業者社長を逮捕 大阪府警

産経新聞 2015年6月26日

経営する介護事業会社を利用している知的障害のある男性になりすましてクレジットカードを申し込み、カードをだまし取ったとして、大阪府警豊中南署は26日、詐欺容疑などで、介護業「キッズ・エスコート」（大阪府吹田市）社長、緒方元一郎容疑者（48）＝同市江の木町＝を逮捕した。「弁護士が来るまで話さない」としているという。

逮捕容疑は平成25年12月上旬、同社の訪問介護サービスを利用する豊中市内の40代男性名義のカード1枚をだまし取ったとしている。緒方容疑者はカードで約50万円を借り入れたが、一部は未返済という。

同署によると、男性には中程度の知的障害があった。緒方容疑者は男性に対し、自宅に利用明細が郵送されても開封せず、同社社員に渡すよう指示していたという。

同社は昨年12月、介護給付費約60万円を不正に受給したとして、市から指定の取り消し処分を受けていた。

### 障害者虐待通報、44件事実と判断 川崎市、防止法施行後131件中

朝日新聞 2015年6月26日

障害者虐待防止法が施行された2012年10月以降、昨年度までに川崎市が受けた「虐待の疑い」の通報は131件で、市はこのうち44件を虐待と判断し、施設を指導するなどしていたことが25日、市議会での答弁などで分かった。

障害者虐待を巡っては、山口県下関市の施設で知的障害者に暴行したとして元支援員が逮捕されるなど、社会問題になっている。

川崎市によると、通報の内訳は（1）家族らによる虐待の疑い81件（うち虐待と判断した事例41件）（2）施設職員らによる虐待の疑い43件（同3件）（3）企業の利用者らによる虐待の疑い7件。（3）のうち強く虐待が疑われた3件は、調査権限のある国に伝えたといい、

### 地域の障がい者応援 宮田で駒ヶ根高原ふくしセミナー 長野日報 2015年6月27日

「第4回駒ヶ根高原ふくしセミナー」（実行委員会主催）が26、27の両日、宮田村の村民会館を主会場に開かれている。障害のある人とその支援者らが参加して、「学ぶ・交わる・楽しむ」をテーマに料理やカラオケなどの体験セミナーを展開。27日は福祉に関わる地元女性3人のシンポジウム、画家でグラフィックデザイナーの原田泰治さん＝諏訪市＝の基調講演を計画している。

県社会福祉事業団などが実行委員会を組織。全国に先駆けて知的障害者の地域生活移行を推進した「長野（西駒郷）モデル」を情報発信するとともに、イベント参加を通して、地域で生活する障害者の豊かな暮らしづくりを応援しようと開いている。

初日は県内各地の福祉施設などから約400人が参加。カラオケのど自慢大会、お弁当教室、フラワーアレンジメント教室、アートワークなどのセミナーを繰り広げた。

お弁当教室は、駒ヶ根グリーンホテル総料理長の山越信治さんの指導で五平餅を作り、卵焼きやハウレンソウのおひたしなどを弁当箱に詰める作業を体験した。24人の参加者が5班に分かれ、協力してご飯をつぶして丸め、みそを塗って焼き、五平餅を仕上げた。行事食の大切さも学んだ。

開会式で実行委員長の和田恭良・県社会福祉事業団理事長は「2日間のセミナーを通して1人でも多くの方が新たな体験をし、明日からの生活に取り入れてほしい」と呼び掛けた。27日は午前9時30分からシンポジウムで「3人の『熱い』女性が語る～共生社会の実現に向けた地域づくり・人づくり」をテーマに、松本徳弥さん（かいご家代表）、大石ひとみさん（わが家代表）、古谷葉子さん（大曾倉ふれんど代表理事）の3人が思いを発表する。基調講演は午前11時から、原田さんが「一本の道」と題して話す。ともに参加無料で、一般も聴講できる。

### 着物の着付けを簡単に「もっ帯ない展」 福岡で

様々な形に仕立てられた「さくら造り帯」を紹介する長沢さん簡単に着付けができるよう工夫された帯などを集めた「もっ帯ない展」が7月1日、福岡市中央区の警固神社で開かれる。市内で帯の仕立て教室を開く長沢明美さん（56）が、高齢や障害などから着物を着るのを諦めている人たちに、着物の良さを改めて感じてもらおうと企画した。

帯は、東京を中心に着物教室を開く鈴木富佐江さん（78）が考案した「さくら造り帯」。着物を着る時は帯を締めて背中結び目「お太鼓」を作るが、さくら造り帯は、帯を折りたたんでお太鼓をあらかじめ作り、縫いつけてある。体に巻いてから帯に付けたひもで結ぶだけで装着できる。一般的な造り帯は、帯を切って仕立ててあり、脳梗塞の後遺症で右手が不自由になった鈴木さんが「大切な帯にハサミを入れたくない」と試行錯誤して開発した。

長沢さんは、2008年に脳梗塞で倒れた母親（80）が、着物を着たいと願っていたことから、どうにかできないかといろいろな造り帯を探した中で、さくら造り帯に出会った。東京の鈴木さんの教室に通い、講師の資格を取得。11年に博多区須崎町に教室を開いた。

着物が大好きだった長沢さんの母親は、元気を取り戻した。教室近くの老人ホームの夏祭りにボランティアで参加し、お年寄りに浴衣を着せた時には涙を流して喜ぶ人もいた。「着物は人を幸せにすると感じた。多くの人に帯を知ってもらいたい」と長沢さんは話す。

もっ帯ない展では、長沢さんや教室の受講生たちが仕立てた帯約50点のほか、着崩れしにくい長じゅばんやファスナー付きの着物も展示する。北九州市の障害者就労支援事業所の利用者が手掛けた織物で作った帯も並ぶ。鈴木さんも来場予定。午前10時～午後5時。問い合わせは、長沢さん（090・7164・0970）へ。

読売新聞 2015年06月27日



### 支えに感謝 歌い踊る

読売新聞 2015年06月27日

◇27日中央区 障害者ら音楽劇

大阪市中央区の生活介護事業所「NPO法人まんぼう」に通う障害者らが27日午後2時から、同区のドーンセンターでミュージカル「楽笑・まんぼうショー 大きな古時計」を上演する。今回で55回目となる舞台に向け、メンバーらは練習に励んでいる。入場無

料。まんぼうは1998年に開所し、知的障害や重複障害がある20～50歳代の男女10人が過ごす。劇団経験のある西村マコト施設長が、「日頃支えてくれる人たちへの恩返しに舞台上で発表しよう」と2003年から公演を始めた。

今回は古時計の持ち主であるおじいさんが、時計の部品と遊びながら環境問題を考えるというストーリー。衣装や大道具はペットボトルのキャップや空き缶のプルトップなどを使ったメンバーらの手作りで、サポーター約40人も出演者や裏方として公演を支える。

メンバーの石橋映理さん(39)は「お芝居は大好き。公演が楽しみ」と言い、サポーターの石黒修さん(65)は「障害のある方への見方が変わる機会にもなると思う。観客も一緒に楽しんで、一つの舞台をつくりあげたい」と意気込んでいる。

### 道化師のパフォーマンスに患者ら笑顔

河北新報 2015年6月27日



#### 患者の手を取りながら皿回しを披露する大棟さん

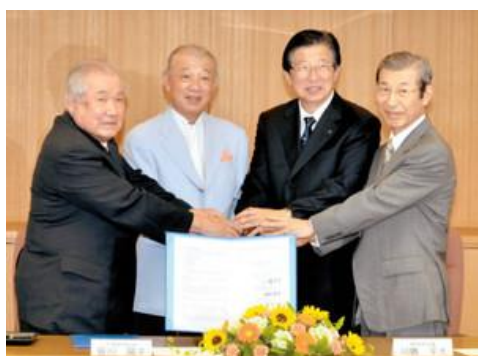
オレンジ色の衣装に赤い鼻を付けた道化師(クラウン)が23日、山形市の国立病院機構山形病院を訪れ、皿回しなどのパフォーマンスを披露した。次々と繰り出される技に、入院中の重症心身障害者や看護師ら約100人から大きな歓声が上がった。

訪問したのはNPO法人日本ホスピタル・クラウン協会(名古屋市)理事長で、「クラウンK」として活動する大棟耕介さん(46)。風船やボールなどの小道具を巧みに操り、椅子を額に載せると拍手が沸いた。

赤平諭美子看護師長(36)は「普段出合えない新たな刺激があった。患者さんたちが笑顔で喜ぶ姿を見られたことが何よりうれしい」と話した。東日本大震災の被災地も訪れている大棟さんは「クラウンの育成にも力を入れ、今後も東北で広く活動していきたい」と声を弾ませた。大棟さんはこの日、国立病院機構米沢病院(米沢市)にも立ち寄った。

### 県、日本財団と災害支援協定

中日新聞 2015年6月27日 静岡



#### ◆緊急活動に基金活用

協定書を取り交わし握手する笹川日本財団会長(左から2人目)と川勝知事ら=県庁で

県と日本財団(東京)などは二十六日、地震などの大規模災害が県内で発生した際、財団がボランティア団体などの活動を支援する協定を結んだ。被災市町への派遣や現地活動の費用に、財団が昨春から三百億円を目標に積み立てを始めた災害復興支援特別基金を活用する。同基金に関連する協定は全国の自治体で初めて。

協定は県社会福祉協議会と県ボランティア協会を加えた四者で締結した。災害時は日本財団が基金を使い、学生や企業の民間ボランティア、NPOなどの緊急活動に助成する。臨時災害FMラジオ局の運営、障害者など援護が必要な被災者の支援にも取り組む。

災害時以外にも、県などが毎年実施しているボランティア受け入れ図上訓練に財団が参加するなど、協力態勢の強化を目指す。

財団は一九九五年の阪神・淡路大震災から国内災害の支援活動を始め、昨年までに四十七の災害で活動。東日本大震災の経験を踏まえ、南海トラフ巨大地震や首都直下地震に備えて基金を設立した。県が二〇一三年に第四次地震被害想定を策定し、全国で唯一、大規模なボランティア受け入れ訓練を実施しているなど対策をリードしていることから、全国

第一号の協定締結となった。

県庁で開かれた締結式で、川勝平太知事は「力強い支援を得てうれしい。県の防災力向上につながる」と述べた。財団の笹川陽平会長は「私たちが災害現場で蓄積したノウハウを生かす。今回の協定をモデルに、全国の都道府県に広げたい」と強調した。

＜協定に基づく主な支援・協力＞

- ・学生、民間ボランティア、NPOなどの派遣・活動に助成
- ・臨時災害FMラジオ局の運営
- ・障害者など援護が必要な被災者の支援
- ・ボランティアの受け入れ図上訓練に参加

(今井智文)

## 障害あるイラスト作家・杉本さん 江戸川で作品展

東京新聞 2015年6月27日



地下鉄博物館で作品展を開いている杉本聖奈さん。後ろは立体イラストと絵カード＝江戸川区東葛西で

まるで額縁から飛び出てくるように、街の風景を立体的に表現するイラスト作家、杉本聖奈（まりな）さん（28）＝目黒区＝の作品展が、江戸川区東葛西の地下鉄博物館で開かれている。先天性の聴覚障害と広汎性発達障害のある杉本さんにとって、気持ちを伝える手段だった絵カードや立体イラスト約二百四十枚に加え、今回初めて制作したジオラマも展示。「青空メトロ」と題する架空の地下鉄駅を出現させた。（丹治早智子）

「青空メトロ」は長さ約三メートル。東京メトロ銀座線をデザインしたクッキー缶の車両とともに、駅下のショッピングモールに集う人々を表情豊かにジオラマで表現した。ホームの屋根下に巣作りするツバメなど、細部にもこだわった。

車両に見立てたクッキー缶は、杉本さんが六年前に東京メトロの人気土産「東京三歩」のパッケージにデザインしたものだ。

都内の美術造形専門学校卒業を機に、二〇一二年からイラスト作家として活動する杉本さんだが、幼いころから周囲の言葉が分からず、自分の気持ちもうまく伝えられなかった。学校は四回、転校した。

イラストで表現する絵カードは、杉本さんが気持ちを伝える「言葉」であり、立体イラストもそのカードから生まれた。強く印象に残った風景を一枚一枚描いては切り取り、貼り合わせた作品は、動きや音までも感じさせる迫力がある。

ジオラマは、子どもの目線で見られるよう低い位置に展示した。「一生懸命走る電車は生きもの。私と同じように電車が大好きな子どもたちがじっと見入ってくれるのがうれしい」。作品に込めた杉本さんの思いを、母香苗さん（55）が代弁する。

作品展は七月十二日まで。午前十時～午後五時。月曜休館。地下鉄博物館は東京メトロ東西線葛西駅の高架下。問い合わせは、地下鉄博物館＝電03（3878）5011＝へ。

## 若者の就労や自立を支援へ サポステが連携会議【福岡県】

西日本新聞 2015年06月27日

就職していない若者の就労や自立を支援し、地域の活性化を目指す「若者サポートステーション（サポステ）」の県内連携会議が26日、飯塚市の飯塚コミュニティセンターで開かれ、福岡、北九州、筑後、筑豊のサポステ関係者約50人が事例報告や意見交換をした

=写真。会議は年1回、県内4施設の持ち回りで開いている。

サポステは、厚生労働省が認定し全国に160カ所設置。県内では福岡市のNPO法人JACFAと学校法人麻生塾に運営を委託している。働くことに悩みがある15～39歳を対象に、臨床心理士や職員による相談受け付け、履歴書の書き方指導、職業体験などを実施。県によると、昨年1年間で筑豊サポステ（飯塚市）に相談に訪れたのは816件、うち61人が会員登録し、52人が進路決定した。



意見交換では「発達障害などの場合、障害者手帳の取得をためらって就職に結びつきにくいことがある」「長く引きこもっている人から働く意欲を出すにはどうしたらいいか」など意見や質問が出た。筑豊サポステの村中千代子所長（61）は「支援機関が情報を出し合って課題を解決し、1人でも多くの就労につなげたい」と話した。筑豊サポステ＝0948（26）6711。

## 児童虐待540件、高止まり 昨年度、児童相談所の対応件数 宮崎県

朝日新聞 2015年6月26日

県内3カ所の児童相談所が対応した昨年度の児童虐待の件数が、540件だったことが県のまとめでわかった。過去最多だった2013年度から20件減ったが、依然として高止まりの傾向にある。県こども家庭課は「住民の通告意識が高まっている」と説明する。

件数は、中央・都城・延岡の各児相が対応した事案を県がまとめた。同課によると相談内容は、食事や入浴をさせないなどのネグレクトが225件（41・7％）で最多。心理的虐待が163件（30・2％）、身体的虐待が142件（26・3％）、性的虐待が10件（1・9％）と続いた。12年度から、心理的虐待が身体的虐待を上回るようになっていくという。被害に遭う子どもは、未就学児が250件（46・3％）と最も多かった。小学生は182件（33・7％）、中学生は83件（15・4％）。虐待を加えるのは実母が357件（66・1％）、実父は130件（24・1％）。継父や継母からの虐待は39件（7・2％）だった。

### ■虐待リスク、欠いた情報共有と連携 都城の乳児餓死、検証報告書 児相につなぐ必要、指摘

児相に情報が届かなかつたために、540件に含まれなかつたケースもある。昨年6月、都城市で生後5カ月の乳児が餓死した事件では、母親の鷺巣綾香（22）と同居人・九平沙耶乃（22）の両被告が保護責任者遺棄致死罪で起訴され、裁判員裁判の準備が進んでいる。

起訴状などによると、鷺巣被告は次男の大志ちゃんが亡くなる約2カ月前から外泊を繰り返して授乳せず、養育を任された九平被告も十分なミルクを与えなかつたとされる。大志ちゃんは栄養不足で餓死した。

大志ちゃんの死を防ぐことはできなかつたのか――。5月下旬、大学教授ら専門家をつくる県社会福祉審議会の検証部会がまとめた報告書が公表された。

それによると、鷺巣被告は13年9月、大志ちゃんの妊娠を市に報告。その際のアンケートで「経済的な不安がある」「パートナーとの関係が良好でなく、連絡も取れない」と回答していた。ただ、市の母子保健担当者は虐待対応の担当者に報告しておらず、報告書では「未婚での若年出産や経済的困窮など、虐待のリスクがあつた」と指摘。情報共有し、児相などと連携するべきだったとした。

また、14年5月に市の母子保健担当者らが2度自宅を訪問したが、不在で面会できなかったこと▽長男（3）が通っていた保育園から「虐待の疑いがある」と市に指摘があつたのに、長男の様子を確認しなかつた点も問題視。「面会が困難な場合は、児相に直ちにつ

なく必要がある」とした。

一方で、「行政の力だけですべての事案に対応するのは困難」だとして、主任児童委員や民生委員による地域の見守り体制を活用すべきだとも提言した。(中村光)

## 【意見】虐待を受けた子どもを排除しない社会に 安孫子健輔氏

西日本新聞 2015年06月26日



NPO法人そだちの樹事務局長安孫子健輔氏

### ◆すべての子がきらめく未来へ

あなたの目の前に、顔を腫らした若い女性が現れたとしよう。聞けば高校3年で18歳。幼少時からずっと虐待を受けてきたという。さて、どう動けばいいか。

まず思い浮かぶのは児童相談所(児相)だ。しかし児相は彼女を保護できない。児童福祉法が保護の対象を18歳未満の子どもに限っているからだ。

18歳なら家を出て働くこともできるじゃないかと思う人もいるかもしれない。しかしそうなれば、高校卒業は極めて難しくなる。友だちも失うだろう。そんな選択を迫るのはあまりにも酷だ。

仮に彼女が働くことにしたとしても、生活していくのは容易ではない。虐待を受けてきた子どもの多くは、規則正しい生活を身につけていない。人を信頼することも苦手で、職場内でうまくコミュニケーションをとることができない。フルタイムで働き続けられる子どもはわずかで、多くは先行きの見えない非正規雇用に頼り続けることになる。危険な労働や、性産業に取り込まれる子どもも珍しくない。

虐待を受けた子どもたちは、こうして社会から排除される。その社会をつくっているのは他でもない、私たちだ。

では、どうすればいいのか。

答えはシンプルだ。この社会が、子どもたちにとって魅力的で、居心地のいい存在になればいい。安全と安心が保障された多様な居場所と、生活を支える豊富な人的・物的資源、そして居場所や資源と子どもたちをつなぐ仕組みがあれば、たくさん子どもたちが輝きを取り戻してくれるはずだ。こうした理念を掲げて、「そだちの樹」は10代後半の少女たちを保護する子どもシェルター「ここ」を2012年に開設し、今年4月には、居場所や資源と子どもたちとのつなぎ役を担うため、相談窓口「ココライン」=<http://sodachinoki.org/kokoline>=を設けた。「ここ」は運営難で一時休止中だが、再開に向けて準備している。

「私には荷が重い」と感じる人がいるかもしれないが、決してそんなことはない。いつも自分を気にかけてくれるアルバイト先の先輩、すれ違うたびに「元気？」と声をかけてくれる近所のおばちゃん、何を話しても優しくうなずいてくれる中学の友だち、そんな身近な人が、子どもたちを闇の中から引き上げてくれることがある。その可能性は誰にでもある。近くに気になる子どもはいないだろうか。まずはその子の背景に、目を向けてみてほしい。すべての子どもたちがきらめく未来へ。さあ、あなたはどうか動こうか。

**安孫子 健輔(あびこ・けんすけ) NPO法人そだちの樹事務局長** 1983年山形県南陽市生まれ。一橋大学法学部卒、九州大学法科大学院修了。弁護士(安原・松村・安孫子法律事務所)。西南学院大学非常勤講師。

## 羊水検査 最多を更新

中日新聞 2015年6月26日

13年2万件超 高齢妊娠が背景に

胎児の染色体疾患の有無を調べる羊水検査が2013年に約2万6000件(前年比3%

増) 実施され、過去最多となったことが、国立成育医療研究センター(東京)の左合(さごう)治彦周産期・母性診療センター長らが実施した出生前診断に関する調査で分かった。染色体疾患がある確率を算出する母体血清マーカー検査も約2万6400件(同9.5%増)で最多。胎児の疾患の可能性が高まるとされる高齢妊娠を背景に出生前診断への関心の広がりが示された。

障害が判明した場合の人工妊娠中絶という倫理的問題も指摘され、正確な情報提供に基づき妊婦の意思決定を支える遺伝カウンセリングの重要性が一層高まりそうだ。

13年には高精度の新生前診断も臨床研究として開始された。結果が陰性なら流産リスクがある羊水検査を回避できるため、同年の羊水検査の動向が注目されていたが、減少には結び付かなかった。左合センター長は「新生前診断は実施施設や対象者が限られ、従来の検査を受ける人が増えたとみられる。検査への理解を深めるための遺伝カウンセリング体制整備や社会的な議論が求められる」と話した。調査結果は、千葉市で開かれる日本遺伝カウンセリング学会の学術集会で26日に発表する。

左合センター長らは1998年のデータから継続して収集。08年までは受託実績がある全ての検査機関を対象に実数を調べ、09年以降は実施件数全体の8~9割程度を占める主要機関分を把握した上で、推計値として出している。

羊水検査は98~02年に1万件前後で推移していたが、徐々に増加して12年には約2万件となり、13年はさらに約600件増えた。

カウンセラー養成を

元お茶の水女子大学教授で臨床遺伝専門医の千代豪昭(ちよ・ひであき)さんの話 高齢妊娠や少子化に伴い、出生前診断へのニーズは今後ますます高まるだろう。妊婦の自律的な決断を支援し、検査技術の暴走を抑える社会的使命を持つ遺伝カウンセラーの養成と、遺伝カウンセリングの普及を急ぐ必要がある。出生前診断は赤ちゃんを選別するのが目的ではない。赤ちゃんを諦める場合もあるかもしれないが、それはたくさんの選択肢の中の一つとして考えるべきで、安心して赤ちゃんを産むことをサポートするためのものとして発展してほしい。

**出生前診断** 生まれる前に胎児の病気や染色体疾患の有無を各種検査で診断すること。妊婦から採血するだけで結果が出るものとして(1)染色体疾患の確率を算出する母体血清マーカー検査(2)ダウン症と18トリソミー、13トリソミーの3種類の染色体疾患を対象に「新生前診断」として2013年に導入された母体血胎児染色体検査があるが、いずれもふるいにかけるスクリーニング検査との位置付けで、陽性の確定診断には羊水検査が必要となる。妊婦のおなかに針を刺して羊水を採取する羊水検査は流産リスクが約0.3%あるとされる。

出生前診断の件数の推移  
※2008年までは実数、09年以降は推計値



### 心の病で労災 過去最多 過労自殺は99件

中日新聞 2015年6月26日

厚生労働省は25日、仕事の原因で精神疾患にかかり、2014年度に労災認定されたのは、前年度から61件増え497件だったと発表した。申請は47件増の1456件で、ともに1983年度からの統計史上最多だった。

このうち過労自殺(未遂含む)は、申請が213件で認定が統計史上最多の99件だった。

過労死問題に詳しい川人博弁護士は「精神疾患の大きな要因は過重労働。少ない人数で多くの仕事をこなしている職場が多いのではないか」と指摘。「仕事がきついと、人間関係

が過ぎすぎてパワハラなどを生みやすい。ゆとりある職場の実現が重要だ」と話した。

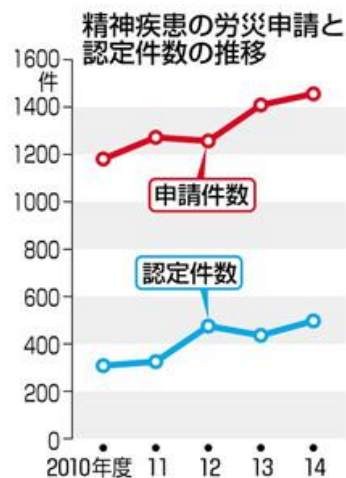
認定されたケースの原因としては「嫌がらせ、いじめまたは暴行」の69件、「月80時間以上の残業」の55件が目立った。女性で「セクハラを受けた」も27件あった。

残業時間を見ると、ばらつきがあるが、月80時間以上の長時間労働は201件。うち160時間以上は67件だった。

職種別では「一般事務」の56件が最も多く、「管理職員」39件、「商品販売」34件が続いた。業種別では運送業や福祉・介護が多かった。

一方、過重労働による脳・心臓疾患で14年度に労災認定されたのは277件で、申請は763件。いずれも前年より減った。このうち過労死は認定が121件、申請が242件だった。

認定されたケースの残業時間は月80時間以上がほとんどで、160時間以上も20件。職種別では認定、申請とも運転手が目立って多く、それぞれ85件と143件。



### 地下鉄車内デザイン一新へ 沿線の特徴を反映 大阪日日新聞 2015年6月26日

大阪市は25日、市営地下鉄5路線の車内デザインを一新すると発表した。第1弾として長堀鶴見緑地線の車両を7月下旬にリニューアルし、その後も各路線のデザインを見直していく。



南港ポートタウン線ニュートラムに導入される新型車両「200系」

桜色のつり革を設置する長堀鶴見緑地線の車内デザイン



長堀鶴見緑地線は沿線に鶴見緑地や大阪城公園が位置することを踏まえて乗降ドア、つり革、床に桜色を施し、華やいだ車内空間を表現する。

計画によると、御堂筋線は連結ドアを号線カラーの赤色にし、乗降ドアは御堂筋のシンボルであるイチョウ並木の柄を採用。海遊館が沿線にある中央線は乗降ドアに魚、天王寺動物園のある堺筋線もドアに動物のイラストを取り入れる。

南港ポートタウン線のニュートラムについても新型車両「200系」（7両編成）を2016年度に導入する際、子どもの笑顔をイメージしたデザインを施す。

デザインの一新について、橋下徹市長は25日の会見で堺筋線を例に「車両に動物をちりばめてディズニーランドの隠れミッキーのようにしたら、おもしろい」と独自のアイデアを披露した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんペクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

